

朝を
ひらく

永田 円了
真国寺住職



お正月の宴会で、何げなく語られたコトバがずっと引っかかっていた。「キンシンゾウオ」。なんと寒々しい響き、深い底なし沼に足を踏み入れたような感覚だった。

改めて調べてみると、「近親憎悪」という四字熟語であった。私にとって初めて耳にするコトバ、冷え冷えとした響きに加えて、漢字が醸し出すおぞましいほどの暗いイメージが心を覆った。

詳しく検索すると、出るわ出るわ、今までの人間関係におけるストレスの原因がみごとにあぶり出されてくる。このコトバは、近しい関係であるが故

キンシンゾウオ

に、憎悪の念が生まれる」という意味である。

70歳手前で他界した父は、酒が好きだった。日頃は寡黙で生粋の禅坊主、しかしいったん酒が入ると人が変わった。飲めば飲むほど乱れ、冗舌が度を越したとき、私の心はいつも傷ついた。

「なんちゅ面白い和尚さん、さあもつと飲んで」と、周りは面白がった。自分の父親でなければ、私も調子を合わせただろう。父親という近しい関係で

あるが故に生まれる憎悪感、許せない気持ち、このいら立ちが私の青春時代の暗点でもあった。

で、果たしてこの嫌悪感は親子関係のような血族間に限られるのだろうか。米国留学時代にこんなことがあった。日本人留学生仲間の中で、1人だけ日本語を一切使わず英語だけで通じた男がいた。「お前日本人だろう。日本人と話す時ぐらい日本語で話せよ!」。私の頭の中はいつもいら立ちのベルが鳴っていた。

一見仲間と同調しない冷たい人間に見える彼、私はそういう人間じゃないと頭の中で拒否する自分。いったい私の頭の中でなにが起こっていたのだろうか。いま思うに、自分の中のも

う一人の自分(裏の自分)は、本当は私も彼のように、周りからどう思われようとも英語で通してみたい、でもそれは同族の中ではみっともないこと、と否定する表の自分。

そのときの嫌悪感は、彼に対してというより、むしろ自身自身に對してであったと、今になって分かってきた。誰かの中に嫌な面を見るときは、自分の中にも同じ要素があるが故に反応するということである。

コトバというものは、物事の本質を見いだしてくれる。「近親憎悪」という言葉と出合ったおかげで、それまでのただ嫌だ、と感じるだけの反射的行動パターンから転じて、その因果関係をみつけ、冷静に自分自身と向き合うことができた。

ではこの気づきを人間関係にどう活用しようか、これからだ。

コトバが明かす本質